



高見恭子

COOL or MOON

COOL or MOON

〔著者紹介〕

高見恭子（たかみ・きょうこ）

東京生まれ。10代はモデルとして、20代はテレビ・ラジオで活躍。現在は小説・コラムも手がける。著書に『ブルー』（マガジンハウス）『2:02』（メディアファクトリー）『恋の欲望』（扶桑社）『Like a chocolate, my life』（フレーベル館）他多数。

COOL or MOON 「クール オア ムーン」

一九九一年八月一〇日初版発行

著者——高見恭子

発行人——鈴木 勤

発行——株式会社 世界文化社

〒一〇二 東京都千代田区九段北四一二九

電話 〇三（三二六二）五一一一（代表）

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

©1991 Kyoko Takami Printed in Japan

禁無断転載・複写

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

COOL of MOON

装丁／内藤高央（Wa-i デザイン）
編集協力／シールーム・ハイ

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongb.com

CONTENTS

わたしのなまえ———5

SOON———9

NOOK———27

WOOER———55

ROOM———85

MOOD———115

最高の恋人———134



わたしのなまえ

わたしは、きげんの悪い小さな虫。

だれかの背中にもぐり込んで、細くのびる触角で、さぐり、かみつこうとたくらんでいる。誘われるまま、甘くていい匂いのするところまで飛んで、夜は湿って暗くて誰にも見つからない石の下で、一日中動かしてつかれた手足をまゐめて眠っている。

だれも話しかけないで、その不用意な品のない言葉で。でもたまに想い出して。それから、鼻をすこし上にむけてくんくんとして、私のいそうなところを想像して。

この前、犬の背中につかまって、ずいぶんと遠くまで出かけた。落ちつかない犬は、いたるところに体をすりつけようとして、そのたびに私は、小さく声

をあげなくてはならなかった。

レストランの前を通りかかった時、どこかで見かけたような男のひとがいて、どうしてだろうか遠いむかしに嗅いだことのあるなつかしい匂いのする手で、犬の頭をなでた。私はせいっぱい首をのぼして、その男をもっとそばで感じたかった。

その男の、くしゃくしゃの笑顔。

切りそろえた爪。

やわらかそうなジャケット。

くるくるとした髪。

私は、触角を、手を、足を、体のすべてをいっぱいにのぼし、彼にふれたかった。犬は、くーんくーんと鼻をならしている。なんてみじめな声なのだろう。私は思いつき犬をふみつけ、細い足を犬の体の中に、ちくつと刺しこんだ。

その男は、ほほえみながら、犬のなまえを呼んだ。

ふと、悲しくなる。それは、心を瞬間えぐられたような痛みと同じ悲しみ。

彼の声はとてもやさしいのに、それだけにするどくまっすぐに、私の体を刺し

た。犬は汚れたしっぽをいっしょうけんめいに振っている。

なまえ…。

こんなどこにでもいる茶色の犬でも、なまえがある。私は、右手で顔をなでる。どうして思い出せないのだろう。なんだか昔に、たしかに呼ばれたことのある私のなまえ。

どこへなくしてしまったのだろう。ゆうべ眠ったあの青い葉っぱの匂いのする石の下においてきてしまったのかしら。

なまえ。

わたしのなまえ。

遠い遠い記憶をやり起こし、でもふつと思う。虫に思い出なんてあったのだろうか。

犬は汚れたしっぽを、いっしょうけんめいに振っている。私は男のひとの顔を見あげている。ねえ、私はなんていうの？

その声で呼んでみて。

SOON











